

---

# 恋のカケラ。

きのりん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋のカケラ。

### 【コード】

N2039I

### 【作者名】

きのりん

### 【あらすじ】

美紀の恋のお話です^^

すこし、間違っているとこもあるかと思いますが・・・  
許してやって下さい> (´ー´)<

「片思い」

良い響き。

「両思い」

すごくステキな響き。

私には、良い響きのヒトカケラも無い。

恋って何？

切ないって何？

好きって何？

「えー！彼氏出来たんだー！いいなー！……！」

「うんツー！すごい優しいんだよー！……！」

友達はまだ恋の話。

私は荒木美紀。

中学2年生。

普通の中学生で、恋をしたことがない。

恋の意味が分からない。

好きって、友達や家族を好きって思うのと、違うの？

切ないって、寂しいって思うのと、違うの？

友達が彼氏の話をしているのは、なにがおもしろいんだか分からない。

「彼氏なんていらなくない？」

言ってみた。

「はいはい！美紀はまだおこちゃまですわ〜」

なんて言葉。

恋をすると大人になれるの？  
意味分かんない。

あたしの毎日はいつもこんな感じ。  
本当に私は、恋をしない普通の中学生。

別に、恋なんてしなくていいと思ってた。

そんなある日、

一人の転入生がやってきた。

「篠原祐貴（せいはらゆうき）です。よろしく！！」

その後の昼休み、篠原君の周りは女子ばかり。  
なんでそんな男子が好きなのか？  
意味が分からなかった。

そりゃあ私だって、「片思い」とか、「両思い」だの  
言葉を使ってみたいよ？

でも、本当の恋を知らなきゃ。意味無いし。

本を読んでいる私の前に誰かが来た。

「あの〜……………」

私がぱつと顔をあげる。

「はい？」

「えつと…………名前教えてくれるかな。」

「え？荒木…………です。」

「荒木さん？よろしくね。」

「は…………はあ…………よろしく…………。」

そのまま篠原君はどこかに行った。

なんで突然？とか、一瞬思った。

でも、まあ、クラスメイトだしね。

それから、毎日のように篠原君は私に話しかけるようになった。

私は、別にヒマだったし、喋るのに付き合っていた。

それから数ヶ月。

「荒木さん。」

「ん？」

「放課後…………体育館裏に来てくれてもいいかな？」

「いいけど…………？」

「うん、じゃ、またね。」

体育館裏に呼び出すなんて、お金でも取られるのかな？

まさか、いじめられるのかな？  
マジメに考えていた。

放課後。

私は念のため財布などの貴重品を友達に預けてから、  
体育館裏に行った。

そこにはもう、篠原君が居た。

「篠原君！！」

「あ、良かった〜・・・来てくれた・・・」

「え？私、約束は破らないよ？」

「そうだよな。荒木さんはそうっばい（笑）」

篠原君は笑った。

「なんで笑うのー？ウチなんか変？」

「うん。何かね、荒木さんらしいなーって思って・・・」

「あたしらしい？」

「うん・・・」

それから少し、静まりかえった。

「荒木さん・・・」

「うん？」

お金なら持つてません！いじめられるほど、変人じゃないです！  
とか、ちよっと思いながらおそるおそる聞いた。

「俺さ・・・」

「うん・・・？」

「荒木さんの事が、好きなんだよね。」

「は？」

「うん・・・なんでだろうね。」

「え・・・は・・・？」

「良かったら俺と・・・付き合って。」

「ごめんなさい。」

私の答えはもちろん即答。

好きなんて思ってなかったし、

まさか、篠原君がそんなこと言うとは思っていなかった。

私は、別に友達として仲良くしてた。

でも、篠原君は違った。

「そう・・・だよな」

「あ・・・」

「ごめん・・・」

そう謝った後、篠原君はどこかへ行ってしまった。

泣いてた・・・よ・・・ね？

私・・・なにかした・・・？

なんか、すごくひどいことをしたと思った。

あまりにもそれが忘れられなく、  
夜、友達にメールを試してみた。

『やつほー^^夜遅くにゴメン

あのみ・・・

今日ウチ、篠原君に呼び出されたジャン？

そんでね、その時こくられたの・・・

ウチは彼氏とかいらから、

ゴメンっていつちやっただけ・・・

篠原君、そのあと泣いてどっか言っちゃったの・・・  
どうしよう。

ウチ、なんか悪いことしたのかなあ？』

数分後、返事が返ってきた

『おお〜！！ついに美紀も恋の年頃かあd) ^ 皿 ^ ( v  
なんてね

まあ、でも篠原君の事は、

好きじゃないの？

好きじゃないなら、そんなに気にする事、

無いと思うよ！！

ま、それは美紀しただけだね！

またなんか有ったらメールして！！

じゃ、お休みゞ(´、´、´)ノ』

「好きとか好きじゃないとかの問題じゃないのに〜・・・」

とか、思った。

でも・・・別に、好きじゃないし

あんまり気にしない方が良いのかも。

自分で思いこむように自分で言った。

その次の日からは、まったく篠原君は私に話しかけて来なかった。  
目も合せない。

そんなことする必要なんじゃ〜ん・・・  
なんて。

ふったのは私の方なのにね。

でも、自分の中に一つ、穴が開いたような気がした。

もう終わった話じゃん？

うっとおしいのが来なくなっただけじゃん？

自分に言い聞かせた。

「でもさ……もうずっと喋ってこないカモよ？」  
友達に言われた。

「え……？」

「だって、美紀。元気ないし……。  
しかも、だれの事考えてるかなんてすぐ分かるよ……！」

「そっか……ゴメン……」

「謝る人、うちじゃないじゃん。」

「え？」

「篠原君……でしょ。」

「なんで……？」

「美紀……まだわかんないかもしんないけどさ。」

「……うん」

「それが、恋なんだよ？」

「え……」

これが……

意味……分かんない。

だって、友達。

友達を勝手に超えたのはむこう……

「だって、ずっと篠原君見てる。」

「み……見てないよ……！」

たしかに、見ていたのかも。

「ウソつけ!!!!!!」

「.....」

「今、きつとねー美紀のココロ。切ないって言ってる。」

.....これが、切ない。

「それで、今の美紀は篠原君と、”両思い”」

.....両思い.....

分かんない。でも、分かりたい.....  
知りたい。恋を。

「ゴメン.....ありがとう.....」

「じゃ、言ってこい!!!!」

「うん.....!!!!」

あたしは走り出した。

好き。好き。好き.....

これが、初めての恋。

”好き” ヒトを思う気持ち

”切ない” もっと、”好き”を深めるもの

”恋” 今、してること

「篠原君!!!!!!」

「荒木……さん……?」

大丈夫。

呼吸を整えて言う。

「好き!!!!!!」

これが、恋のカケラ。

(後書き)

最後まで見てくれてありがとうございます。ございました。  
よろしければ、感想まってます。^^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2039i/>

---

恋のカケラ。

2010年10月19日01時55分発行